

Ⅲ 研究の成果と課題

1 学校課題研修会

「将来の社会自立に向けて、自ら学ぼうとする力を育むための教育活動について ～視覚障害教育及び病弱教育の専門性の維持・向上の取組～」を研究主題として、5つの研究グループで研究に取り組んだ。

各グループでテーマを設定し、「キャリア発達段階表」を活用しながら、キャリア発達と障害特性に関する視点で一人一実践に取り組んだ。各自の事例を持ち寄り、グループで意見交換し、検討を重ねたことで、一人一人の将来の姿を見据えて指導・支援を行うことの重要性が明らかになった。しかし、各々の授業での実践を他教科に般化したり、家庭や進路先などにつなげたりすることが課題として残された。幼児児童生徒のキャリア発達の実態や背景を丁寧に把握し、日々の授業の積み重ねが、将来の社会自立につながることを常に意識して授業を行い、教員間だけでなく、保護者や関係機関と連携しながら指導することが必要ではないかと考える。

2 障害種別研修会

(1) 令和5年度の取組

実施日	演題・講師・内容
第1回 7月25日(火)	「全盲の児童生徒の将来の社会自立に向けて、卒業後に必要な力や指導について」(オンライン) 山田勝久氏 社会福祉法人光道園理事 西井侑子氏 社会福祉法人光道園ライトワークセンター主任 ・重度重複の方などが、加齢とともに問題になる咀嚼や排泄等の身体機能の再獲得や、社会自立に向けて学校生活で広げられる可能性や作業・余暇を含めた卒業後の生活について、事例を含めた話を聞き、理解を深めることができた。
第2回 8月1日(火)	「心に悩みを抱える児童生徒への支援について」 喜田裕子氏 富山大学 人文学部 教授 ・本校から3事例を挙げ、事例検討を行った。講師からは、心のケアやソーシャルスキルトレーニングを生かした関わり方、保護者支援などの助言をいただき、心に悩みを抱える児童生徒の実態把握と支援について理解を深めることができた。
第3回 8月7日(月)	「見え方に応じたタブレット端末の効果的な利活用について」 秋口俊輔氏 富山高等専門学校 電子情報工科 准教授 ・本校の4事例について、利用可能なアプリの紹介や開発が検討できそうなアプリの説明を聞き、授業等での活用についての手掛かりを得ることができた。また、VR機器の活用の仕方等、質疑を通じて今後の課題を見付けることができた。
第4回 8月7日(月)	「本学における鍼灸学専攻学生への学修支援について」(オンライン) 福島正也氏 筑波技術大学 保健科学部 講師 ・筑波技術大学で行われている学習意欲を高めるための支援についての話を聞き、教員との関わりが学生の学習意欲を高めることや、外部講師の活用などで授業に刺激をもたせることなど、本校での取組に繋げるための手

	掛かりを得ることができた。
第5回 8月8日(火)	「児童生徒のこころの理解と支援」 深澤大地氏 富山県こどもこころの相談室 臨床心理士 ・こころの支援における沈黙の重要性や、助言を行うことの問題点等について、事例の紹介と説明を受けた。参加者で意見交換しながら聴講したことで、子供の主体的な成長を促す関わり方について、理解を深めることができた。

(2) 令和6年度の取組

実施日	演題・講師・内容
第1回 7月25日(木)	「日常生活スキルを育む上での困難さや必要な支援方法について」 高島 豊氏 富山県視覚障害者福祉センター所長 日常生活訓練士 ・視覚障害者にとって必要な訓練の特性や指導のポイントについて、具体的な事例をもとに話を聞き、理解を深めることができた。特に、本人が大切にしたいことをもとに、個に応じた訓練内容や目標を設定し進めていくことの重要性を学んだ。
第2回 7月29日(月)	「視覚補助具の紹介と使い方について」 齊藤新治氏 三和メディカル株式会社 営業 ・視覚補助具の特性や機能の細かい違い、選ぶ際のポイントについて、具体的な事例を聞き、実際に器具を使用して理解を深めることができた。使用する本人の所感、症状だけでなく見た目や細かい要望にも観点を広げることを学んだ。
第3回 7月31日(水)	「病弱生徒の支援について ～自己理解を深めるためには」 喜田裕子氏 富山大学 人文学部 教授 ・本校から3事例を挙げ、事例検討を行った。講師からは生徒の様々な思いを受け止めることや、具体的な心の落ち着かせ方や関わり方に関する助言をいただき、心に悩みを抱える生徒の実態把握と支援について理解を深めることができた。
第4回 8月5日(月)	「理療研修センターにおける技術研修とあはき師に求められる力について」(オンライン) 古川直樹氏 札幌視覚支援学校附属理療研修センター 指導員 ・卒業生4名への指導事例や、「就労のためのチェックリスト」を作成・活用し、あはき師として就労し、自立した生活を送ることを目指して指導した取組を聞き、本校の取組との違いについて考える良い機会となった。
第5回 8月30日(金)	「災害時における体と心のケアについて」 林亜伊子氏 日本赤十字社富山県支部事業推進課 健康安全係長 ・台風や地震等の自然災害の実際の様子や災害時における被災者や障害者へのサポート、学校として平時からできる防災対策や地域との連携の重要性、支援者のストレス反応とその対処法など、今後の参考となる助言をいただいた。

(3) 成果と課題

この二年間は、盲・弱視・病弱・理療科・寄宿舎の5つの専門性の領域に分かれて研修を実施した。各グループ内で障害種別研修会の担当者を決め、研修内容や外部講師の依頼、当日の企画

や準備、進行等を行った。各グループの研修会を全教職員にも案内し、希望する職員が積極的に研修会に参加した。

一年次は、日頃悩んでいることや事例を取り上げて、講師からの助言を受けたり参加者同士で活発に意見交換したりすることで、幼児児童生徒への指導や支援を振り返り、各グループの今後の課題を明確にすることができた。二年次は、さらにグループの研修主題に寄り添った研修を行い、グループ研究を深めたり、各自の実践の参考にしたりすることができた。

今後も県外の講師によるオンライン研修の実施や、実習や演習等の研修において、実技を行ったり、実物を使いながら説明を聴いたりすることで、より高度な技術獲得や実践力につなげたいと考える。

3 全体研修会

(1) 令和5年度の取組

実施日	内容
第1回 7月7日(木)	令和5年度 校内研究・計画「研究主題と進め方について」 教育支援部研修係 ・今年度の校内研究について、全教職員で共通理解を図った。
第2回 7月27日(木)	全日盲研北海道大会 全体会講演(オンライン) 「ライフ・イズ・クライミング ～見えない壁だって、乗り越えられる」 小林幸一郎氏(フリークライマー) NPO 法人モンキージック代表理事 一般社団法人 日本パラクライミング協会 ・今年度は、参集とオンラインによるハイブリッド方式で行われた。全教職員で講演を聴講した。
	全日盲研北海道大会 分科会(オンライン) 第1分科会(学習指導1): 図書室 第2分科会(学習指導2): 小会議室 第3分科会(生活): 視知覚訓練室 第4分科会(特別支援): 講師室 第5分科会(理療): 相談室1 ・5つの会場を設置し、希望する分科会に参加した。第3分科会では、竹内寄宿舍指導員が「一人一人の自立に向けた生活支援の在り方ー自己理解に基づく将来像への理解を通して」を発表した。
学校訪問研修会 11月18日(金)	令和5年度 学校訪問研修会 公開授業(2, 3, 4限) グループ別研修会: 盲、弱視、病弱、理療科、寄宿舍の5グループに分かれて、各グループの研究主題に関する協議を行った。 教育課程研修会 初任者懇談会 全体研修会: 富山県教育委員会 県立学校課 特別支援教育班 竹原主幹による講話を聴講した。
(第3回 1月)	日本弱視教育研究会 基調講演 ・今年度は参集型で開催されたため、視聴できなかった。研修に参加した職員の資料を回覧し、情報提供を行った。

第3回 2月21日(火)	グループ研究報告会 ・今年度の研究・研修活動を報告し合い、学んだことを共有し合った。
-----------------	---

(2) 令和6年度の取組

実施日	内 容
第1回 4月22日(金)	令和6年度 校内研究・計画「研究主題と進め方について」 教育支援部研修係 ・今年度の校内研究について、全教職員で共通理解を図った。
第2回 2月21日(金)	グループ研究報告会 ・今年度の研究・研修活動を報告し合い、学んだことを共有し合った。

(3) 成果と課題

一年次は、研究主題や進め方について共通理解を図り、視覚障害のある方の生き方に触れ、将来の社会自立のためのキャリア教育の重要性を再確認した。また視覚障害教育における他校の取組を知ることで、自分たちの取組を振り返って、授業実践の参考にしたり、専門的な知識の獲得につなげたりすることができた。しかし、二年次は、校内研究について共通理解を図り、研究の成果を報告し合うだけだった。今後は、視覚障害教育及び病弱教育に関する最新の情報を全教職員で学び合い、専門性の維持・向上を目指す取組を目指したいと考える。

4 まとめ

この二年間は、新しい研究主題のもと、新体制での研究を行った。前々年度の意見から、年次研修は学部で行い、学校課題研修会に一本化することで研修の回数を減らし、他校の研究スタイルを参考にして、学部を交えた縦割りグループも含めた5グループで、一人一実践に取り組んだ。

本校には、幅広い年齢層で、多様な障害の幼児児童生徒が在籍し、一人一人が目指す将来の社会自立に向けた指導が求められる。この二年間は、キャリア発達の視点の目標から各学部卒業後に目指す姿を思い描きながら実践に取り組み、一人一人の将来の姿を見据えて指導・支援を行うことの重要性を改めて実感した。学部を超えて意見交換することで、キャリア発達の視点から幼児児童生徒にとって、現段階で必要な力を考えることができた。しかし、将来の社会自立を目指すためには、幼児児童生徒の将来の生活を想定し、日常生活スキルやコミュニケーション能力、視覚補助具の活用力など、現在の障害の状況に応じた支援の方向性について、教員間だけでなく、家庭や関係機関と情報共有しながら進めていく必要があることが明らかになった。また、研究に取り組む中で、私たち教職員の課題として、専門性の維持・向上が求められることも分かった。

今後、教職員一人一人が、視覚障害教育及び病弱教育のセンター的役割を担う一員としての自覚をもち、グループ研修において、視覚障害教育及び病弱教育の専門性を学び合い、教科指導の専門性や実践力、即戦力を身に付け、指導や支援を行うことができるよう、日々努めたい。